

先天性難聴の赤ちゃんへの音楽療法の取り組みについて

○村上か乃, 赤星多賀子 1), 浅沼 聡, 安達のどか 2),

1) (公財)東京ミュージック・ボランティア協会, 2) 埼玉県立小児医療センター耳鼻咽喉科

【対象者および目標】

新生児聴覚スクリーニング検査 (NHS) の普及により、先天性の難聴の発見が可能になったが、産後間もなくのわが子の難聴の診断に、ショックのあまりうつ状態になる母親は多い。埼玉県立小児医療センター耳鼻咽喉科「難聴ベビー外来」では早期発見されてからの取り組みとして、2000年より多職種の専門家がチームを組み乳児とその両親に支援を開始、音楽療法も方法のひとつとして取り入れられた。対象は、産科の新生児聴覚スクリーニング検査で要再検となり、本耳鼻咽喉科の精密検査に於いて両側難聴と診断されたおおよそ生後4ヶ月～1歳の乳児約15名とその両親（主に母親）。目的は①音楽活動を通じた健全な親子関係の構築、②音遊びを通じた音への気付き、③他児家族との交流の3つとした。

【方法】

難聴ベビー外来は毎月1回（12回で終了）第4火曜日に開催され、当日の流れは耳鼻科医を中心としたスタッフのミーティング→耳鼻科医の診察及び言語聴覚士（以下 S.T）の検査→集団音楽療法→個別の補聴器外来（午後）。音楽療法の参加スタッフは、耳鼻科医、看護師、S.T、保育士、ろう学園乳幼児担当教員、保育士、難聴児の子育て経験を持つ先輩ママなど約10名。内容は補聴器を装用し太鼓による音の振動、模倣の促し、即時反応、楽器活動、布遊びなど、骨振動、視覚、触覚等を利用したプログラムで、楽しみながら音への興味や気付き、親子のコミュニケーションを促した。

【結果】

2015年度、音楽療法終了後のアンケート項目「親自身は楽しいと覚ることがあったか？」の質問に、「いつも楽しい」と回答した親は前期71%だったが、後期には14%上がり85%の親が「いつも楽しい」と回答した。適切な情報提供と多職種の協力の下での音楽療法は、親を安定させ児との相互交流をスムーズに育み、目的①の親子関係の構築に有効であった。しかし重度重複障害の親の中には「いつも楽しい」の欄には一度も印がなく、全ての家族に達成したとはいえなかった。補聴器の装用と振動を伴った親子の音遊びは、音への興味や気付きを促すことができ目的②は達成された。目的③の他児家族との交流については、母親同士が談笑し昼食を共に摂ったりする等の活発な交流がみられ、「難聴ベビー外来」を12回で終わりたいと複数の発言があった。

	前期 初回～4回	中期 5～8回	後期 9～最終回
いつも楽しいと感じた	71%	78%	85%
殆ど楽しいと感じた	20%	17%	9%
時々楽しいと感じた	9%	5%	6%
殆ど楽しくなかった	0%	0%	0%
全く楽しくなかった	0%	0%	0%

【考察】医療における音楽の効果について和田(2011)らは、乳児の情緒の発達促進の効果と、母親の情緒安定の効果報告している。親子での色々な音遊びはとりわけ母親の情緒安定に繋がりその結果、児へのよい影響をもたらすと考える。半面、難聴および他の障害を併せ持つ乳児に対して、今後は障害の種類や程度に合わせたプログラムの工夫と、個別での対応が望まれる。

参考文献： 和田 玲子著 「新生児期に入院中に音楽に関わったことが、その成長発達に及ぼした効果について」紀要 visio:research reports(2011)